

# PROFILE

## 金子 誠

日本医科大学生理学（システム生理学）



本年4月1日付で日本医科大学・生理学（システム生理学）の主任教授に就任いたしました。私は昭和58年に山形大学を卒業してすぐに同第三内科を専攻として大学院に進学しました。第三内科は私が興味を持っていた神経内科を担当しており、大学院で神経病理を勉強させていただけるということで進学したのがなぜか生理学との出会いの始まりとなりました。どうも内科の教授は“生理学=数式（Goldman-Hodgkin-Katzの式）”という思い込みがあったようで、たまたま私の数学の成績がよかったことから生理学に行くことが決まったと聞いています。山形大学では加藤宏司先生のところで海馬薄切切片標本を使った電気生理を教えてくださいました。加藤先生はまだ赴任された直後で、実験セットも組み立て中で私も三角アングルを糸鋸ですいぶん切った記憶があります。そんな中何とか研究もまともな大学院3年のときに学位論文も完成したので、大学院4年目は臨床になるのかなと思っていたところ、私の知らないところで九州大学の太村裕先生のところに内地留学する話が進んでおり、気がついたときにはいよいよ生理学から離れることができなくなっていました。九州大学では幸いにも“哺乳類中枢神経細胞の単離法の開発とパッチクランプ法を用いた応答記録法の樹立”に成功し、この研究が当時生理学研究所におられた金子章道先生の目にとまったのが、私の網膜研究のスタートでした。その後もいろいろと寄り道をしましたが、この17年ほどは網膜研究に落ち着いております。

網膜生理学は絶滅危惧種（以前共同研究者に“先生はトキミたいな人、いやイリオモテヤマネコカ

な？”と言われました）と思われるかもしれませんが、私自身はまだわかっていないことがたくさん残っている興味深い分野だと思っています。最近は分子生物学的手法も網膜研究に導入されるようになり、今までの技術では解決できなかった問題も少しずつ明らかになりつつあります。私自身も今後はこうした研究手法を使って研究をすすめていければと考えておりますし、新しい研究手法を使った網膜研究の面白さを若い科学者に体験してもらい、将来生理学を志してもらえればと思っています。また上に書かせていただきましたように、私のようにいい加減な動機で研究を始めたものでも、生理学は研究の面白さを十分に知ることができる学問であることも、若い科学者に伝える機会があればと思っています。

私の担当させていただく教室は、佐久間康夫先生が主宰されていた教室です。優れた研究成果を残された先生の後任になれましたことを光栄に思うと同時に、後任として恥ずかしくない研究ができればと思っています。今後ともご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

### 略歴

- 1983年 山形大学医学部卒業
- 1987年 山形大学大学院医学研究科修了
- 1987年 山形大学医学部内科学第三講座研究生、医員  
(1986~1987年 九州大学医学部生理学第一講座 内地留学)
- 1988年 九州大学医学部生理学第二講座医員
- 1989年 岡崎国立共同研究機構生理学研究所助手

(神経情報部門)

1991年 山形大学医学部生理学第一講座助手  
1993～1994年 文部省在外研究員(連合王国ロンドン大学薬理学教室)

1995年 慶應義塾大学医学部生理学教室専任講師  
2001年 慶應義塾大学医学部生理学教室助教授,  
准教授  
2012年 現職

## 山中章弘

名古屋大学環境医学研究所神経系分野 2



平成 24 年 4 月 1 日より名古屋大学 環境医学研究所 神経系分野 2 水村和枝教授の後任に就任しました山中章弘と申します。生理学会会員の皆様には謹んでご挨拶申し上げます。

私は大学院生の時には循環調節に関わる血管平滑筋の研究をしていたのですが、博士課程の途中で視床下部の神経ペプチド「オレキシン」が同定され、研究分野を末梢組織から中枢神経へと大きく転換しました。昔から中枢神経系には多少なりとも興味があったので、じゃあ中枢神経やってみよう程度の軽い気持ちで始めたものの、神経系の知識や実験技術が全く無く、一体全体神経細胞というもののはどのように扱ったら良いのか見当すら付きませんでした。しかし、知識は無くとも行動力だけはあったため、とりあえず神経を研究している研究室に無理矢理お邪魔して、実験技術や知識を一つずつ習い(盗み)、研究室に戻って実験系を立ち上げるというプロセスを何度も繰り返しました。免疫組織化学、遺伝子工学、電気生理学(スライスパッチクランプ・インビボ細胞外記録)、行動薬理学(脳室内投与・脳波筋電図測定)など現在用いている実験手法はほとんどこの時に習得したものです。その当時、何も知らない私を快く受け入れて実験を見せて頂いた諸先生方には心から感謝しております。また、いろいろな土地にお邪魔して実験技術を教えて頂いたついでに、その土地の美味しいお酒や食べ物も教えて頂きました。実験系の立ち上げ時は日々失敗ばかりでしたが、最も楽しい時間でもありました。

今後はこれまでの経験を基に、後進の育成に力を入れたいと考えております。ところが、近年は博士課程進学希望の学生が激減しているようです。育てたくても学生が居なくては育つものも育

ちません。私の名古屋大学における最初の仕事は学生を勧誘するところから開始です。しかし、研究者を目指す学生を増やすには、何故減っているのかにも焦点を当てる必要があると思います。少子化やゆとりなどの諸問題もあるかと思いますが、私は学生が目にする「研究者」が楽しく研究を行っていない(行えなくなっている)からではないかと思っています。我々が研究費獲得や業績評価に追われ疲弊した背中を見せては、その業界にやってくる若者が減って当然です。現行の制度などを変えることは私には出来ませんが、研究の楽しさを実践的に伝えていくことで生理学研究分野に微力ながら貢献出来ればと思っています。まだまだ若輩ですが今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

### 略歴

- 平成 6 年 静岡県立大学 薬学部 製薬学科卒業
- 平成 12 年 筑波大学 大学院 医学研究科 博士(医学)取得
- 平成 12 年 同大学 先端学際領域センター 助手
- 平成 14 年 同大学 基礎医学系 講師
- 平成 18 年 日本学術振興会 海外特別研究員  
エール大学医学部神経外科学 兼任(～平成 20 年)
- 平成 20 年 自然科学研究機構 生理学研究所 准教授
- 平成 21 年 科学技術振興機構 さきがけ研究員 兼任
- 平成 24 年 名古屋大学 環境医学研究所 神経系分野 2 教授